

審査を終えて

須田伸一^{すだ しんいち}

(慶應義塾大学経済学部教授)

今回も多数の応募論文が集まったことに対し、審査員の一人として感謝申しあげる。最終審査進出者の論文では、課題4と5を扱ったものが少なく、各一編ずつという結果となった。課題4(「お金」の近未来)に関していえば、応募数は多かったが、目を引く論文に乏しかった。高校生にとって、この課題は難易度が高かったといえよう。一方、課題5(今の時代に『学問のすゝめ』を読む)では応募数自体が少なかった。『学問のすゝめ』を「読まず嫌い」な高校生が多いようなら寂しく思う。

さて、小泉信三賞に選ばれたのは稲垣早佑梨さんの作品で、即効性や実用性を偏重する今の社会の価値観を問い直すことを目的に、文学の価値を論じている。

文学を人間の本質に直結したものと捉え、科学とは異なる意味で文学の「有用性」を示した点が評価された。ただし、導入部分には改善の余地があるだろう。「はじめに」で、テーマの選定理由だけでなく論文の全体像も示したなら、読みやすさが向上したに違いない。

次席の鷺山拓見君の作品では、三本の映画を通して戦前から現在までの日本の家族のあり方を考える視点を新鮮に感じた。マイナス点は、何かを論証しようとする意識が希薄なこと。論文は感想文ではないので、より緻密な論理構成が望まれる。タイトルの意味もよく理解できなかった。

佳作作品の中では、『学問のすゝめ』が現代の高校生に対してもつ意味を考察した早坂章君の作品を個人的に一番高く評価した。福澤の著作内容をよく消化したうえで書かれており、「公共への貢献」という視点から『学問のすゝめ』の今日的意義を捉えるロジックは、すんなりと理解できた。

つぎに佐藤蘭美さんの作品は、延命治療という重いテーマに挑戦し、家族と延命治療の関係についての三つの提言で締

めくくったものである。延命治療の現状を海外の取り組みまで調べてまとめた点は評価できるが、前半部と最後の提言の間に少しギャップを感じた。提言の実現可能性等について、より立ち入った分析が欲しかった。

また、宮下凜さんは、専門家育成のためには文理の区別が必要だが、市民としての役割を果たすためには、文理の垣根を超えた幅広い視野を持つべきであると主張している。この点には全面的に賛成するが、論文がこの結論に向けて論理を積み上げていくような構成になっていないと感じた。たとえば、第二章の位置づけをより明確にしてみたい。

最後に将来の応募者へのアドバイスをいくつか書いておく。厚みのある小論文を作成するのに必要なことは、日頃から様々な分野に関心を持ち、新聞、書籍、ネットなどから幅広く情報を収集する態度である。問題意識をもって情報に接すれば、それだけ得るものも多い。また、読む人の立場に立つて論文の構成を決めることも大事である。最後は推敲を何度も重ね、論文の完成度を高めよう。